○これからの学問

宗教が問いかけるもの

——大都市近郊の宗教センター＝生駒からの報告

／三木　英（英知大学助教授）

一　大都市近郊宗教へのアプローチ

大阪の街のどこからでも、東方に屏風のように連なる山並みを見ることができる。屏風は京都盆地の外れ、淀川のほとりの男山に発し、奈良盆地の集水路・大和川畔へと至って、大阪・京都・奈良の府県境をなす。南北およそ三十五キロ、東西の幅五キロ、そして標高は最高値六四二メートルの山系、これが「生駒」である。

大阪市の中心部から近鉄電車に乗れば、三十分程度で西側山麓に着く。直線距離にしておよそ十五キロ。日曜祝日ともなれば、多くのハイカーたちの憩いの場となる、大都市近接のオアシスである。この生駒がいま、不思議な霊気を醸し出すスポットとして、注目を集めている。「神さぶる生駒高嶺」（『万葉集』）と古歌にも詠まれた地に、現代も神々が多数ましまし、都市住民が篤く信仰し願いを託してあまた訪れるというのである。

生駒の宗教についての報告は、昭和初期に民俗学者・赤松啓介が栗山一夫の名で踏査し発表したもの（「大阪及び附近民間信仰調査報告」『民俗学』第四巻・昭和七年、他）が唯一といって誤りではあるまい。そこでは、おどろおどろしい庶民の信仰が描かれている。これに刺激され、生駒の宗教の現在を調査しようという計画が持ち上がってきた。計画推進の主体は、宗教現象に関心を寄せる関西在住の研究者たちからなる「宗教社会学の会」である。宗教社会学の会は、昭和五十六年より調査を開始した。そしてそこで、あたかも異文化に接したかのような、カルチャーショックに似た衝撃を経験す

る。何しろ、近代化・合理化・都市化、そして宗教の世俗化について学び論じてきた研究者たちである。呪術から解放されていない世界が、しかも時代の先端を行く大都市の近郊に見られるなら、既存の理論や概念は見直されねばならない。時代を導き、そして我々を導いてきた「知」が、揺らぐのである。

第一期調査の成果は、『生駒の神々』と題されて昭和六十年に出版された。この刊行が契機となって、生駒が関係学界はもとより、テレビや雑誌等のマスメディアにも頻繁に取り上げられ注目されるようになるのである。そして続いて第二期・第三期と調査研究は積み重ねられ、現在に至っている。調査からは、生駒全域に約六〇〇の社寺があることが判明している。その七割が、大阪に面した西側斜面にあることもわかっている。そして生駒を訪れる人々が年間延べ一〇〇〇万人にも及び、その多くが定期的に参詣する固定信者であることも推定されている。

以下では、生駒へ誌面を借りて案内しよう。ただし、生駒は広く、枚数は少ない。そこで、筆者が調査において直接に関与した地区に限定することをお断りしておく。

二　生駒の神々

(1) 朝鮮寺

近鉄電車奈良線に乗って出かけよう。まず、額田駅で下車する。山側、額田谷へと急な上り坂を歩くと、すぐに巨石を祭祀する大石教会に到着する。明治中期に創設された単立宗教法人で、ご神体に祈れば、そこに宿る「大石明神」が霊示を与え、病を癒してくれるという。

そこから約二十メートルばかり先には、信貞寺がある。さらにそこから十メートル程度離れたところにある不動寺と共に、奈良県吉野に本拠を置く金峯山修験本宗末の寺院であるが、日本の仏教寺院というよりは「朝鮮寺」と名づけられたカテゴリーに属するものである。

周知のように大阪府には、日本全体の三割にあたる二十万近くの韓国・朝鮮人が住んでいるが、朝鮮寺とは、その婦人層によって信仰され、その依頼によってシャーマニズムの巫祭を行う寺院のことをいう。本堂のほか、北斗七星を中心に虎を従えた山神と海の神である竜王とを祀る七星堂と呼ばれる小堂があり（本尊と星・山・海の三神を同一建物に祭祀する場合も多い）、賽神場があるのが、通常の朝鮮寺の構成である。

そしてシャーマニズムの巫祭を「賽神（クッ）」というのである。「クッ」は何か不幸があったとき、また何か祈願をするときに催される独特の巫俗である。シャーマンが諸神諸霊を招き、特に生者の妨げをなすような祖霊をもてなし、災いを及ぼさないようにして霊の世界へと帰ってもらうのであ

る。この儀礼は、大規模なものになると一週間以上もかかり、費やされる費用も五〇〇万円に及ぶという。

生駒には、六十強のかかる寺院が存在する。消長が激しく、もちろん地図には掲載されず、また外観が普通の民家とほとんど変わらないため、総数の正確な把握は困難であるが、一地域にかくも集中している例は、全国どこにもない。いま我々が歩いている額田谷にはまだ七つ。次に下車する予定の額田の北隣の石切駅から生駒山頂へと通ずる辻子谷には十二。額田より南、近鉄瓢箪山駅裏の鳴川谷、服部川駅裏の山畑・服部川地区、さらに高安山下の黒谷には四から九つの朝鮮寺が「生きている」のである。

このほか、寺には滝行場がしつらえられ、また白鷹大神・黒竜大神といった神名、あるいは修行に励んだ人物の霊名を刻んだ「お塚」がひしめいているが、滝行場とお塚は生駒の必須アイテムである、と言っても過言ではない。朝鮮寺に限らず、あらゆる宗教施設に、また谷沿いの道にそれらを見ることができるはずである。

信貞寺・不動寺の二つの朝鮮寺を過ごしさらに登ると、ようやく住宅地がとぎれて山に入る。山道を進んでゆけば、谷川わきの狭いところに、いくつか家が建っているのを見るだろう。朝鮮寺である。立ち寄らずに急坂を登り、金峯山修験本宗大阪別院・天竜院に着く。駅から寄り道せずに（頑張って）歩いたとして三十分。額田谷の宗教施設は、ここで終点である。

(2) 修験道寺院

天竜院というより長尾の滝といったほうが、通りがよいかもしれない。生駒を代表する自然滝で、弘法大師修行の伝説を残し、江戸期の高僧・慈雲尊者が山居した庵の跡も、滝の傍らに残されている。天竜院の前身は、この滝を行場として明治末年に建てられた参籠所なのである。現在は本尊八大竜王を祀る本堂のほかに、蔵王堂・末光稲荷社・阿弥陀堂・信徒会館・寺務所、そして岩窟に密着して建てられた錦成竜王祠をもつ。山中に起居して神霊と交わり、験力を修することを本義とする修験道の寺院は生駒には数多いが、天竜院はその代表格である（先述の二つの朝鮮寺は便宜上、修験道の宗派に帰属しているといえよう）。

著名な滝行場であるがゆえに、多くの人が訪れる。その中には、季節も時刻も問わず滝に行をする熱心家も少なくない。滝によってケガレを祓い、滝が象徴する竜神等の神霊から力をもらい、山を下って市中に入り顧客（クライエント）の困苦に対処する霊能者＝シャーマンが、確かに存在するようである。また、霊能力はなくとも、宗派の教師資格を得て一般信者を指導する宗教的活動家も、少なくはない。天竜院に保管されている信者名簿をもとに実施した質問紙調査によ

れば、全体の一六％が自分で教会を運営したり、講を指導したりしている。将来教会をつくることを予定している者も含めれば、二四％にも上る。そして彼らの導きゆえか、一九七〇年を境に修験本宗に入信する人の数が、漸増していることが調査結果から知られる。七〇年以降入信者の三分の二は女性が占め、彼女たちが自身の家族を巻き込んで、さらには友人知人に働きかけて次代の活動家になることも、明らかになっている。

シャーマン（教師資格保有者）たちは、都市の俗なる世界と生駒の聖なる世界とを媒介する存在である。彼らが核となって形成される集団は、従来の地縁・血縁という運命的ファクターを集団形成の原理とする氏神―氏子関係や檀那寺―檀家関係と同じではない。かといって、教義によって結ばれ布教することを第一義とする組織的な新宗教のたぐいでもない。いうなればネットワークと表現するほかないルースな結合が、生駒において見いだされるのである。

(3) 石切神社

生駒の名瀑を眺めてひと息ついたら、もと来た道を戻る。電車に乗り込み一駅、石切駅で降りる。駅から石切神社まで、七〇〇メートルほどの緩やかな参道を下ってゆく。神社側とは反対方向、山頂へと通ずる辻子谷筋も朝鮮寺や滝行場が点在する一見の価値ある地区であるが、割愛する。

駅を出て少し歩くと、尼僧姿や神職姿の占い師たちを、目にするはずである。彼らと彼らに依頼するために並ぶ人を見て神社に向かおう。

参道は左右とも店舗が並び退屈しない。先の占い師と同業の、運命鑑定・祈祷の看板を掲げた店が多いのは、石切周辺の特徴であろう。「病気の原因が一〇〇％わかる」「必ず治る」と書かれたのぼりが風にはためく。漢方薬店も多い。参道途中にある「耳ナリの神様」は、その隣の漢方薬店の経営になるものである。関西方面では「赤マムシドリンク」によってその名を知られる坂本漢方の本店も、ここにある。やはり宗教に乗り出しており、参道沿いの「石切大仏」と「石切大天狗」という二つの宗教施設を法人化し運営している。

その他、地蔵や不動明王を祀った小祠もそこここにあり、線香の煙が絶えない。

平日にこの道を歩いたとしても、その人通りの激しさに驚くだろう。日曜祝日の混雑ぶりが並ではないことが、想像できる。人出をあてこんで食堂や衣料品店が軒を連ねており、どの店も、参詣者の大半にあたる中高年層の女性を見据えた品目をそろえている。「おばあちゃんの（関西版）原宿」のありさまである。

石切神社は幕末以降、「デンボ（腫れもの）の神さん」として近在の人気を得、鉄道の開通とともに大流行して、今日見

るような宗教法人・神道石切教へと発展を遂げたものである。どんな病気にも「よく効く」と、年間三五〇万人の崇敬を集める大神社である。境内に足を踏み入れるや、驚くような光景が視界に飛び込んでくるだろう。お百度を踏む群衆が、そこに存在するのである。お百度といえば人目を避けるようにして深夜に一人で、というイメージは粉砕される。日曜や神社の祭日ともなると、二〇〇人以上が本殿と鳥居の間を声を発することもなく、ひたむきに細い楕円状になって回っているのである。人々の熱気を感ぜずにはおれない。調査によると、参詣者の二〇%が楕円に加わっているはずである。そしてその五〇%が、病気平癒を願っているのである。

石切周辺をにぎわす人々の七〇%は、少なくとも月に一度以上はやってくるという固定信者である。しかし彼らのうち、神社の祭神の正式名称を知る者は極めて少ない。神道石切教の教義についても、同様である。神社が主導する組織への加入率も、低い。制度化された宗教と関係せずとも、自らの自由意志でもって織りなされる庶民信仰のしたたかさが、かいま見られるようである。

(4) 生駒聖天＝宝山寺

石切神社と共に生駒における最大手といえるのが、「聖天さん」と親しまれ、年間三〇〇万人を動員する宝山寺である。宝山寺へは、石切駅へと戻り電車に乗り込んでさらに一駅、生駒山系を東西に貫く生駒トンネルを抜け出た奈良県側にある生駒駅で降りる。駅前からケーブルカーに乗り換え宝山寺駅で下車。そこから徒歩およそ十分である。

宝山寺は、湛海律師が十七世紀に開創した寺院である。本尊は不動明王ながら、湛海の勧請した大聖歓喜天（＝聖天）への深い信仰によって特徴づけられる庶民の寺である。聖天は絶大な御利益を与えてくれる商売の神なのである。庶民の篤信のほどは、境内を本堂に向かって歩いてゆくとよくわかる。道の両わきに石柱が立ち並び、奉納された金額が彫り込まれているのだが、壱千万円・弐千万円の数字が少なくないのである。本堂の横にはブロンズの不動明王像があるが、そこには奉納・壱億円の文字さえ見える。

聖天の縁日である毎月一日と十六日には、多くの参拝者が訪れる。境内の混雑ぶりは一日のほうが激しく、さらに一日の深夜の人出には圧倒される。平成三年十月三十一日の二十三時四十五分から十一月一日の一時二十分まで、九九二人の参拝が確認されているほどである。日中の参詣者が劣らず多数であることは言うまでもない。その中で、輪袈裟を首にかけた高齢の男女が目立つ。彼らは講のメンバーたちである。講は境内に専用の詰め所を有し、またおみくじやお札・線香・ろうそくなどを販売して寺院業務をアシストする栄誉をもつなど、寺院との密接な関係を保ちながら、独自に行事を

立案し実行する俗人だけの集団である。それに参加する人々は講元を中心に、仲間と共に信仰に励み、精神の修養に努めようとする人々である。それ以外に、仲間たちとの交流を楽しみに入講する者がいることも軽視できない。そこでは、宗教が親睦のためのメディアとして選ばれているわけである。

三　非合理なるものの復活

そろそろ生駒の地をあとにしよう。まだまだ歩き足りない気分である。こうして歩き見てきたところに、生駒の宗教が集約されているとは思えない。おそらく、今後調査されて発見されることを待つ何かが、まだ存在していることだろう。とまれ、生駒の神々がこれまでに投げかけてくれた問いかけを受け止めておきたい。

近代主義者はかつて、こう予言したはずである。シャーマニスティックで現世利益的な民俗宗教が、その非合理性ゆえに、早晩消滅するであろう、と。この予言に、生駒の神々は否という。生駒に向かう人々とて、最初から神々を訪れたのではない。悩みの解決を求めて、病院をはじめ世俗の、都市の機関を頼ったはずである。そして満たされなかったがゆえに彼らは都市の周辺に、生駒へと向かったのである。そこには心身の痛みを共に苦しみ、共に泣いてくれる仲間がいた。お百度や滝での行は、人生が社会に流されるものでなく自分で形成するものであることを、確信させたことであろう。人々の組成がネットワーク型であるのも、それが合理的に編成された組織とは異なるからこそ、採られるのである。とはいえ、人々の生活の基盤は、あくまで近代的な都市にある。神々が教えてくれたものは、非合理なるものが合理性とは両立不可能な敵対するものではない、ということなのである。

世界は呪術から解放され尽くさず、ふたたび聖化されるのだろうか。そうであるとしても、それは単なる過去の再現ではない。合理主義を補う形での復活であることを、これからの人間と社会を研究する学問は、忘れるべきではないだろう。

●宗教社会学の会による調査成果は、次のとおり。

・宗教社会学の会編『生駒の神々――現代都市の民俗宗教』創元社・一九八五年

・塩原勉編『日本宗教の複合的構造と都市住民の宗教行動に関する実証的研究――生駒宗教調査』昭和六十・六十一年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、大阪大学人間科学部・一九八七年

・塩原勉編『現代日本におけるネットワークの研究――宗教行動と社会的ネットワーク』平成二・三年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、大阪大学人間科学部・一九九二年

講義を考える

授業に対する十の試み——「国際法Ⅰ部」の実践報告

／波多野　里望（学習院大学教授）

「男は、強くなければ、生きてゆけない。男は、優しくなければ、生きている価値がない」。ハードボイルド小説に登場する探偵フィリップ・マーローの有名なセリフである。テレビのコマーシャルなどにも時どき使われているから、ご存じの方も多かろう。私は、これを次のようにもじって使っている。「授業は、楽しくなければ、聞いてもらえない。授業は、厳しくなければ、聞かせる価値がない」

しかし、授業で学生を楽しませるというのは、けっして容易なことではない。ことに学習院大学法学部の場合には、国際法Ⅰ部が、

①選択必修科目である（法学部には「必修」がない）

②配当年次が、入学したての一年生である

③一クラスの受講生が五〇〇名を超える

ので、その難しさが倍加される。そこで、私は次のような工夫・努力を試みている。

一　年間の授業日程表を年度初めに配る

すべての学生が年間を通して授業に全出席してくれれば、これに越したことはないが、なかなかそうは問屋がおろさない。学生が、授業よりも麻雀やサークル活動に引かれる原因の一つは、毎回の授業のテーマがあらかじめ具体的に知らされていないことではなかろうか？　そう考えた私は、「×月×日の授業では何を取り上げるか」「そのテーマに関係のある記述は教科書の×頁と×頁に載っているのか」を明記した通年日程表（いわゆる「シラバス」とは異なり、

授業内容は書いてないが、日割りについてはシラバスより詳しい）を作り、学年初めに全受講生に配ることにした。

それも、「海洋汚染」とか「戦争の違法化」とかいった月並みなタイトルでは、学生にとって魅力に乏しいと思い、

「外交特権」→「青ナンバーは『天下御免』？」

「宇宙」→「静止衛星軌道は『満員御礼』」

と、なるべく「やわらかいタイトル」をつけてある。

また、「一度休むと講義の続きがわからなくなるので、その後もずるずると欠席してしまう」という学生が多い。そのため、授業は、「読み切り講談」にならって、毎回、「一話完結」方式をとっている。そして、休講をした場合には、その日の分の講義は、日程表で年度末にあらかじめ組み込んである「予備日」に補講することとし、次回以降の授業日程には変更を加えない。

したがって、学生たちは、安心して、「面白そうだな」と思う授業のある日だけ選んで「つまみ食い」をすることもできるわけである。

二　話し方に留意する

内容がどんなにすばらしい講義であっても、教師の話がよく聞き取れないようでは、一文の値打ちもない。

(1)　したがって、私は、まず「声」について次のような点に留意している。

①自分が「この程度でちょうどよいだろう」と思うのより、少し大きめの声で話し、「よく聞き取れるか、どうか」を最後列の学生に時どき確かめる。

②マイクを使う時は、持ち方が悪くて雑音が入らないか、口に近づけ過ぎて呼吸音が入っていないか、確認する。

③声の「大きさ」は十分でも、声に「張り」がないと、教師の話すことが学生の頭（心？）に浸透しにくいので、「語勢」が落ちないように体調を整えておく。

④さらに、声に「艶」があるほうが、聞く側にとっては心地よい。しかし、「艶」の有無は生まれつきの部分が多く、かんたんに変えるわけにはいかないから、私は「せめて、自分ののどに適当な湿り気を与えておこう」と、夏には冷たい麦茶、冬には温かい紅茶の入った小さな魔法瓶を、教室にいつも持っていく。

(2)　しかし、こうして声をいくら整えても、かんじんな「話し方」がまずくてはなんにもならない。したがって、その点については、次のように心がけている。

①学生に覚えてもらう必要のある「専門用語」以外は、

難しい言葉（特に専門的な略語）を使わない。
②わかりにくい言い回し（二重否定など）は、なるべく使わない。
③ワン・センテンスをなるべく短くする。
④発音やフレーズの区切りを明確にする。
⑤特に「語尾」をはっきりさせる。
⑥できるだけ「ゆっくり」話す。ただし、最近の若者は、速いテンポを好む傾向があるので、聞き流してもよいと思われる部分はアップテンポにして、授業にメリハリをつける。

三　板書に留意する

教師の話はよく聞こえても、黒板に書く文字が小さくて読みにくいと、学生がイライラするので、板書する場合は、次の点に留意している。
①最後列の学生にも十分に読み取れるだけの大きさの字（教室の広さによって異なるが、数百名収容する大教室の場合には、二十五センチ角ぐらい）を書く。
②いくら大きくても、字が「薄い」と読みにくいので、「筆圧」を十分に加えて、「濃い」字を書く。
③いくら「濃くて大きい字」であっても、照明の関係で「線が細い」と読みにくいことがあるので、そのような場合には、長さ二センチくらいのチョーク（手ごろなのがなかったら、長いチョークを適当に折って作ればよい）を寝かして使い、太さ二センチの字を書く。

四　学生から目をそらさない

私は、「授業とは、教師と学生との真剣勝負である」と考えている。したがって、講義をしている間は、学生からけっして目をそらさない。板書をする時でも、学生のほうに顔を向けたまま、右手をひねるようにして肩越しに字を書く。

もちろん、授業が単調にならないよう、時には、意図的に教科書に目を落としてその一部を読み上げることもあるが、それは、一回の授業のうち、せいぜい三回までとし、九十分のうちの五分以内にとどめる。

しかし、教師がいくら学生に顔を向けていても、学生が条約集や六法全書を見るために下ばかり向いていたのでは、両者の間のコミュニケーションが盛り上がらない。そこで、学生が下を向かなくてすむように、授業の中で参照すべき

条約や法律は、あらかじめＯＨＰに起こし、教室の大きなスクリーンに映し出す。

また、私の視線が一カ所に固定・集中しないよう、教室の隅々まで万遍なく目配りをすることは言うまでもない。

五　ＯＨＰとスライドの活用

(1)　ＯＨＰの長所

ＯＨＰ(オーバーヘッド・プロジェクタ)には、次のように多くの長所があるので、私は、平均して毎回五十枚くらいのＯＨＰシートを使っている。

①ラジオとテレビとを比べてみればすぐわかるように、講義も、聴覚だけに訴えるより、視覚と聴覚とに同時に訴えたほうが、学生の頭に入りやすい。

②地名や国名なども、地図の上で示してやると、学生としては、イメージをつかみやすく、記憶にもよく残る。

③耳で聞いただけでは理解しにくい言葉（遡河性資源・降河性魚種など）や紛らわしい言葉（司法と私法など）も、スクリーンに映し出せば、誤解されにくい。

④教科書では文章として書き流されていることも、表や図にして示すと、学生に理解しやすくなる。

⑤ＯＨＰを使うと、使わない時のおよそ二倍の情報量を同じ時間内に学生に伝達できる。

(2)　ＯＨＰの使い方

このように、ＯＨＰはまことに便利なものではあるが、シートの作成にやや時間を要するのが難といえば言えよう。しかし、いったん作成してしまえば、その大半は、その後何年も使えるので、けっして損ではない。特に、次の点に注意すれば、よりよいシートを作ることができ、また、使用の効果も上がる。

①シートに書く字は、二センチ角以上とする。

②色が飛ばないように字は黒で書くのがよいが、黒一色だとドギツイので、赤・青・緑などで、下線を引いたり、縁どりをしたりする。特に地図の場合は、海の部分に水色を塗ると、陸地との境がはっきりして見やすくなる。

②黒とその他の色とが混じるときたなくなるので、色をつけるのは、シートの裏からのほうがよい。

③全部を一枚のシートに初めから書いてしまわず、何枚かのシートに書き分けて、それを順番に重ねていくと、時間的にも空間的にも立体感を出すことができる。

④画面の一部に注意を引きたい時には、指示棒を使って

スクリーンを指すのがふつうであるが、高いところには手が届かないこともあるので、適当な太さの編み棒で、シートの上を直接に指すほうが能率がよい。

⑤条約や法律の条文などは、いちいち書き写さなくても、拡大コピーをそのままシートに印刷することができる。

⑥書き損じた場合、使っているのが水性のペンであれば水でふくだけで消せるし、油性のペンでも、マニキュア落とし（除光液）かラッカー薄め液を使えば落ちる。ただし、そのような液は揮発性なので、換気をよくしておかないと、シンナーを吸ったときと同じことになる。

(3) スライドの活用

授業に変化をつけて、かつ、より強い印象を学生たちに与えるために、私が訪ねた難民キャンプや視察したPKOの活動の模様を、随時、スライドで見せることにしている。

六　Q&Aとディベート

受講生が五〇〇人を超える大教室ではあるが、それにもめげず、私は、学生との間でQ&A（質疑応答）方式を、できるだけ多用している。歴史的なテーマの時には無理だが、予備知識がなくても論理的に考えれば答えを出しうるテーマの時は、主として服装を手がかりに（名前はとても覚え切れない）どんどん指名をして質問をぶつける。

また、年に何回かは数人の学生を教壇に上げて、二組に分ける。そして、「北方領土」のときは日本かロシアかの、「竹島」の場合には日本か韓国かの立場に立って、議論を闘わせる。

七　ゲストを迎える

授業に変化をつけるために、機会さえあれば、いろいろなゲストを呼んでくる。いままでに、友情出演をしてくれた外国人だけでも十人になる。現在は、宇宙開発事業団に勤めている国際法ゼミの卒業生に、毎年、最先端の情報を提供してもらっている。

八　学年末試験とアフターケア

学年末試験は、学生が、問題を読んでから「記述式」と「短答式」（五肢選択・穴埋めなど）のいずれかを選べるようにしてある。

「記述式」で「優」をとった者には、国際法ゼミ機関誌『ユスゲン』を進呈し、また、「記述式」を選んだ学生が希望すれば、成績発表後に一人ずつ研究室に呼んで答案の講評をしてやる。

九　学生にも自己にも「厳しく」

私は、学生にできるだけサービスはするが、その反面、学生に対してもけっこう厳しい。授業中に私語やあくびをした者はその場で立たせ、場合によっては退室もさせる。

そのかわりに、「自己にも厳しく」をモットーにして、「最新の正確な情報をつねに提供する」よう心がけている。そして、そのためには、ＯＨＰのかなりの部分を毎年書き直す（国連加盟国の数や、ソ連邦→ロシアなど）だけでなく、授業の当日の朝刊に載った記事をただちにＯＨＰに起こすこともあれば、ニュースの正確さを確かめるために外務省などに電話をかけることも珍しくない。

十　学生からのクレームに対応する

以上のように、私は私なりに授業に対して工夫も努力もしているつもりであるが、それでも、学生の側から見ると不満な点も多々あるに違いない。そう思うので、一学期の終わる二週間前に学生からアンケート（無記名）をとり、それまでの授業に対するクレームを自由に書いてもらう。そして、次の週に、それらのクレームに対する私の考えを述べ、「もっともだ」と思われる点は、二学期からでも、早速改めることにしている。

最近の例を挙げると――

クレーム①＝ＯＨＰのシートをめくるのが早過ぎて、ノートがとれない。

私の対応＝(a)シートを平均十枚くらい減らす。

(b)ノートをとるべき時とそうでない時を、その都度をはっきりさせる。

(c)ノートに写させたいシートの場合は、時間をたっぷり与える。

クレーム②＝ＯＨＰを使うために、教室が暗くて、目が悪くなった。

私の対応＝従来のハロゲンランプ式のＯＨＰの代わりに、光源が数倍も強いメタルハイランド式の新機種を教務課に頼んで購入してもらい、教室の照明を落とさなくてすむようにした。

講義を考える

研究と教育の同一性

／高橋　正治（清泉女子大学教授）

一

歴史学者のマルク・ブロックは『歴史のための弁明――歴史家の仕事――』の序の冒頭で、次のように言っている。

「パパ、歴史は何の役にたつの、さあ、僕に説明してちょうだい」。このように私の近親のある少年が、二、三年前のこと、歴史家であるその父親にたずねていた。読者がこれから読まれようとするこの本について私の言いたいことは、この本が私の返答であるということである。というのは、一人の作家が博学の人々にも、小学生にも同じような口調で話すことができるということほど立派な賛辞を、その人のために私は考えだせないからである。少なくとも、一少年のこの質問を――おそらく私は即座には彼の知識欲を満足させることに、十分な成功を収めなかったのだが――私は喜んでここに箴言として記憶にとどめておくだろう。たしかに、ある人々は、これを素朴なきまり文句と考えるかもしれない。ところが反対に、私には全く適切であるように思われるのである。このきまり文句の提出する問題は――このなだめにくい年ごろの少年の厄介な正直さはあっても――まさに歴史の正当性についての問題にほかならない。

それ故、歴史家は以上のようなかたちで、答弁することを求められている。彼は内心いささかびくびくせずには、それを思いきってやれないだろう。その職業に生涯の大半をささげた職人の誰が、自分の生涯を賢明に用いたかどうかを考えたとき、いまだかつて良心のいたみを

感ぜずにおれたであろうか。だが、問題は同業者組合的なモラルの小さな配慮をはるかに越えたものであり、そこには、我々の西欧文明がことごとく関係しているのである。（讃井鉄男訳、岩波書店刊）

学問を進めていくべき究極のところは、本来初心として念頭にあるはずのものである。学問はもともと、素人の問題意識から発生して、素人の中に回帰していく性格のものであるので、生きた学問というものは、一般の人々とともに生活している感覚の中で行われるべきものである。研究者にとって、専門外の世間一般の人は自分の学問の究極を問う人たちなのである。それは自分の初心として出発してきたところであり、かつ回帰すべき目標でもある。我々が大学に身を置くということは、専門的なことを教えるということ以前に、教育の場にいるということから、学生とこのような生きた学問の初心に根ざした情熱をもち、人間としての平等意識の中で交わらなければならない。それは学問と教育の同一性を意味する。

二

次に我々は、中学・高校のことを理解しなければならない。受験勉強に追われて学生は、多かれ少なかれ神経症になっているのではなかろうか。本質から離れたところで、学習目的もはっきりしない状態で機械的に行われ、自分の経験を参加させてじっくりと考察・工夫する暇もなく、教えられた考察法の中で、考察することもなく学習を進めており、そのような過程で優秀といわれる学生であるために創造力に欠けるということも出てくるのである。そのままの学生を前にしてなすべきことを強要してはならない。学生の地平に立って、その過程がどのようなものであったかを本質的なところで話し合い理解することである。惰性的に点数評価を見慣れていれば、頭のよしあしの差があるような錯覚を起こすであろう。成績が悪ければ頭が悪いと思い込み自滅していく。人間の脳は二〇〇〇グラムはあり、脳の成分に優劣があるわけではない。いやなことをすれば一時間で眠くなるのに、好きなことをすれば疲れもせず、徹夜もできるのが人間である。それぞれの活力を回復させることが肝要なことである。同じ質の頭は使い方によって差が出るのであり、これは我々の学問の方法の問題でもあるのである。

ある学生は二年次のとき、思わずリポートを一〇〇枚書いたことに心を開かれ、卒業論文で『源氏物語』に関する

もの四五〇枚、西脇順三郎の詩について二〇〇枚を提出した。お互いに生活の中で無意識にしこりとしているものを除き合うということが、いかに重大なことであるかがわかる。頭がよければいい知恵が出る、というような神がかりのことを思い込んでいてはどうしようもない。考えるということは、知っている知識を組み合わせて新しい結論を出す営みという、当たり前の基本的なことから積み重ねて自覚していくことから始めなければならない。自分自身を完全に活用する根拠を探るのである。学問では頭を自覚的に使うのであり、我々が実践していることを分析して伝えればよいのである。このような、可能性を見透かすことによって正常な状態を回復するように講義を組み立てることが、私の最も念願していることである。

三

考えるということは、知識・経験の組み合わせであるが、わからないことも、欠けていた一つの知識が加わることによって条件がそろい解決する。それはどこにあるかわからない。学問の発達した現在では、従来の専門内だけの知識では間に合わないことが多い。その可能性の確率を高めるためには、様々な専門家との交流の機会をもつことである。

我々の小規模の大学では、まず教育の結合が容易であるので、その具体的な場として人文科学研究所が造られた。例会によって各先生の話を聞き、専門としているテーマ・分野を確認し、日ごろの話題として話し合えるようにした。その成果は最初から上がった。第一回例会で私が話したとき、アラン・J・ターニー教授が、それはキーツですと言われた。無―有―無で、そのとき初めて negative capability ということに関心をもつことができた。私の「生成の論理」が西田幾多郎の体系にほぼ重なることを教えられたのは、哲学の小野寺功教授であった。

このようなことがあって、その成果は数人の間にまたたくうちに広がった。それは我々の間に感動をもたらし、研究室に閉じこもる生活から、会話の場に引き出されることになり、激しい討論の中で、子供のようにうれしさの込み上げる交わりをもつようになった。騒いでいるので学生も好奇心をもって見に来るようになり、研究室に入り込んで聞き始め、話し、我々の仕事の手伝いも買って出て、仲間に入るようになった。考えてみれば、我々も学生時代に立ち帰った振る舞いをしていたのである。学生にも仲間意識をもってもらったことは収穫であった。そこでこれをさら

に積極的に、講義の形で、研究室を教室へもっていってみようと考えた。できあがったものだけを話すということのほかに、研究の現在進行形の形で授業をしようということにしたのである。最初は哲学の小野寺功教授、近現代文学の武田友寿教授、それに古典文学の私と三人で、一般教育の中の「総合コース」の授業として、「日本を考える」というテーマで講座をもった。

授業は、三人の教師は毎回出席して、自分以外の先生の講義も聴講する。一時間の講義のあとは質疑応答・討論となる。進行の仕方によっては、前の講義によって次の先生は考えに修正を必要とすることも起こる。この問題も早々に起こった。私が第一回を話したとき、武士道のことが出てきて、私は武士道に対し批判的な態度をとった。ところが次の武田教授は内村鑑三のことを取り上げ、その根本に武士道の問題を当然のこととして置かれたが、私の武士道に対する考えと違っていたので避けて通ることができず、修正の必要を感じられ、次の講義の予定を変更して扱わなければならなくなり、一週間きりきり舞いをして準備されたということであった。真剣勝負とはこのことで、一人で考えを組み立てるのではなく、その過程に討論が割り込んでくるのである。何が起こるかわからないので、一番緊張しているのは我々三人であった。ときには授業のことも忘れて夢中で討論することもあったが、学生は興味をもって、生きた学習として聞いてくれていたようである。

小野寺教授は西田幾多郎の研究者であり、京都学派の方々からも注目され、アメリカの学会でも京都学派の人々と共に代表として発表して好評を受けている人であるが、学生からわかりにくいといわれ、どのようにしたらわかるように話すことができるかということに苦労されていた。わかりやすさの追求は、研究のうえで新しい発見と深化と直結した問題であることを自覚され、一層の研究の進展を実現された。

完成された綿密な論理は飛躍がなく、万人のものになるはずである。これはいままでの学問をさらに発展させる契機となるのである。そして一年の終わりに三人がそれぞれたどった過程の図式は、極めて類似したものであった。互いの研究に影響し合って一層の安定感をもった。四十名余りの学生は、要旨を記述し、自分の考えるところを加え、四〇〇字原稿用紙一〇〇枚以上にまとめて提出した。

このことがあってから、学生と学問を通じての親密度を増し、仲間意識が強まり、大学生活がそのような形で展開するようにもなったのである。

これに味を占め、平成二年に第二回目として、前回の小野寺教授と私のほかに、シスター塩谷淳子教授にお願いして、「宗教と人間」というテーマで行った。講義内容は「人間の精神成長の問題を自覚の深化としてとらえ、存在の自覚への過程を考える」として紹介した。私は思考―思想―宗教という過程として考えているので、思考は変わりやすい不安定な考え、思想は個人の範囲では一定した考え、つまり「思想」の上には特定の名称がつく。特殊の名称がとれて普遍的思想となったとき、それが宗教ということになる。したがって普遍的真理を追究する学問は、すなわち宗教を目指すはずのものと考えていた。そのような意味でこのようなテーマと取り組みたかったのである。

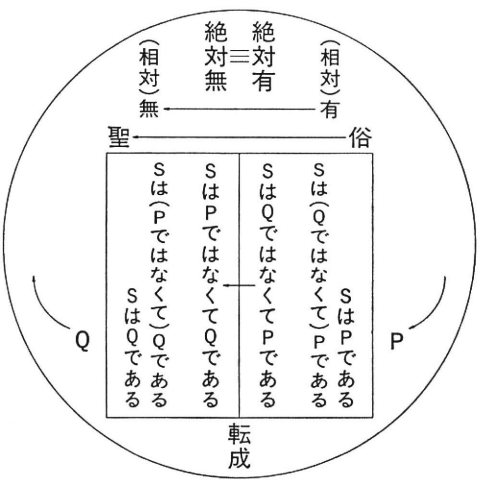
小野寺・塩谷の両教授はキリスト教神学の研究を進めている。私の「生成の論理」もそれらと酷似していた。私事になるが、私は文学研究の方法として、日本の古代中世の古典から「生成の論理」を抽象した。それまでの研究で一応すべて間に合うようになっていた。私は完成したと思っていたのである。ところが、その図は、図としては一部左右対称という点で欠点があった。しかし、間に合っていたのでそれにはあまり注意を払わなかった。

それは、塩谷教授の講義の日であった。七月初旬の暑い日であった。話の中に、「出エジプト記」に出てくる「ありてあるもの」という言葉があった。ふと聞いていただけのようであったが、私は絶対無に対する絶対有という言葉を思いついた。それに従って、有の世界とだけ考えていたものが、相対有という言葉に変わった。にわかに図が左右対称になったのである。文学研究をしていた者にとって、ある途中までの研究で事足りていた。しかし、それを図に表すと、その先の考察を促された。それだけでは止まらないのである。そこは哲学的な考察である。そしてこの最後のところは、まさに宗教の世界であった。そこのところは抽象理論であって、まさに坂を転がる石のごとくに、あれよあれよと進展するのであった。その日は私の人生の大祭日であった。そのことについての説明をする余裕はないが、唐突ながらその図だけを次ページに挙げておく。

私は海軍予備生徒として出陣し、回天特攻隊に編入されるはずの訓練を受けていたことから、転換して文学部志望になり、哲学科ではなく国文科を選んで「汝自身を知れ」というテーマで自前で考えようとしたのである。自分自身で納得のいくように独りで考え続けたのであるが、人生には意外なことが繰り返し繰り返し起こるものだと、つくづく感じている。

私はこの授業のおかげで画竜点睛ができたのである。

実は偶然のことで、ここで書くのもわざとらしい感じがするのであるが、昨日、この授業に出ていた卒業生から手紙を受け取った。授業で精神成長や生き方の問題を考える機会をもつことができ、弱い自分が力づけられ喜びを心から感じていた。しかし卒業して二年たったいま、実社会の中でつらい思いをし、自分との闘いに明け暮れしているが、あのときの力を借りたい。そこであのときのリポートを送ってくれるように言ってきた。四年次生に返却するのを忘れそのままになっていたのである。



四

人文科学研究所はまた、学内の先生の交流に関する演出をするところでもある。春秋三回ずつ、土曜自由大学を開催している。一般のカルチャー講座と違って、例会の聞き手を拡大しただけである。自分のいまの学問が、どのくらい一般の人と語り合えるものかという厳しい実験なのである。あなたの専門に関して部外者の我々はこのようなことを聞きたいということで、テーマをこちらから要求していることも多い。それと取り組んで新しい道を切り開いたことに感動された先生もいる。

我々の大学は全体が研究所のようで充実した学問ができ、だからこそ、そのまま講義の方法も本来的なものになることができたのである。学生も講義を原因とする交流を主とする本来の大学の姿をもつようにしている。

——それにしても、これは小規模大学で、学問の情熱と、すばらしい人格の先生方の集団であるからで、私はこの奇跡の中にいることを心から感謝している。

卓球

荻村　伊智朗（国際卓球連盟会長）

「モンタギュー伯爵様　ご招待状　次の日曜日の午後、ピンポンをいたしませんか。そのあと、ダージリンの新茶をご用意いたしております」

二十世紀の初めごろ、英国の上流階級の流行は、お茶会の招待状に「ピンポンの会」と書くことだった。いまも、無数の招待状が残されている。モンタギュー家の息子アイボアがもの心ついたころからの四半世紀、欧米は卓球ブームだった。

新世界アメリカ合衆国で、綿の長繊維を原料とするセルロイド球が発明された。コルクやゴムの塊を毛糸でくるんだボールを打ち合うゴシマは、あっという間に、セルロイドのピンポンにとって替わられた。たおやかなご婦人方には、柄の長い、羊皮を両側に張った軽いラケットで、音色も明るいラリーのピンポンがぴったりだった。

同じころ、ピンポンの流行に感心していた日本人がいた。明治三十五年、体育取り調べ係として英国に六カ月派遣された、体育学専攻の坪井玄道だった。文明開化を急ぎ、欧米

列強の日本進出にいかなる口実も与えまいとした明治新政府は、有為の青年たちを海外に派遣し、海外文化の吸収に努めていた。音楽取り調べ係として渡米した神津専三郎は、帰国して十二音階の音楽を教える学校を開いた。嘉納治五郎はスポーツを移植し、学校体育の場を活用して婦女子にも参加の機会を与えていた。

坪井がハタとひざを打った理由の一つには、ピンポンは、老若男女を問わず普及できる、欧米エスタブリッシュメントの流行スポーツだったこともある。

帰国を前に、坪井は英国で一番有名なジェイクス社の卓球台・ラケット・ボールなどを三組求めた。帰路は船であった。インド洋を越え、長旅の末に横浜へ着いた坪井は、旅の疲れをいやすと、卓球台の試作にとりかかった。本郷は赤門の前、美満津運動具店が、坪井の指導のもとに、十台の試作に成功した。坪井は早速、自身が教鞭を執る東京女子高等師範学校・東京高等師範学校などで卓球を広め始めた。

卓球はこうして旧制高校、帝国大学、そして私学に広まり、やがて社会人クラブや官公庁、そして企業内スポーツへと波及してゆく。

坪井があとにした英国では、ピンポンは遊戯から競技へ発展する。母のお供のお茶会でピンポン大好き少年になったアイボア・モンタギューは、ケンブリッジ大学生となり、大学卓球クラブのリーダーを務める。やがてモスクワ留学から帰った彼は、大学院学生のまま、一九二六年、ロンドンで九カ国の国際会議を招集し、弱冠二十六歳で国際卓球連盟を創設、初代会長に任ぜられる。以来在任四十一年、今日の卓球の〝平和志向スポーツ〟としての名声の基礎を築いた。

大正期に入ると、卓球用具メーカー三社の支配による三つの日本卓球協会が設立され、実学を巻き込んで対立し、ついには神宮大会参加を差し止められる事態を招く。

〝家貧しくして孝子出ず〟というが、大同団結がなった昭和十年ごろ、学生卓球界に偉才が現れる。天才にして努力家の早稲田の今孝、剣道から転向して学生チャンピオンになった関西学院の渡辺重伍、後に川崎製鉄の社長となり、日本卓球協会の会長を務めて第四十一回千葉世界選手権大会を成功させた東大の岩村英郎らである。

岩村らの学生卓球連盟幹部たちは、「目を世界に転じよ！」と大人たちの世界に警鐘を鳴らし、学生卓球ルールを国際式に変更する。これによって、日本の卓球選手の世界選手権大会出場は、名実ともに可能になってゆくのだから、岩村たち

の先見性はみごとであった。

二年後の昭和十三年（一九三八年）、ハンガリーの世界チャンピオンたち、サバドスとケレンの日本遠征が実現する。一月の寒い日、満場立錐の余地もない日比谷公会堂の舞台で、学生チームは思わぬ緒戦完敗に顔色を失う。見たこともなかったラバーラケット、シェイクハンドグリップ、そして消える魔球のフィンガースピンサービス。トップを承った立教大学の川村澄は、ケレンの最初の五本のサービス全部にノータッチの屈辱、そして惨敗。後にアジア大会監督として荻村・富田の世界制覇コンビを薫陶した川村は、舞台の袖で男泣きする。だが、後に球聖とうたわれる今孝が、第二戦からみごとな勝利を収める。そして、渡辺がこれに続く。

日本は勝った。しかし、欧州卓球の技術には目をみはるものがあった。渡辺は伝統のペングリップを捨て、日本のシェイクハンドグリッププレーヤー第一号となる。多感熱血の学生卓球が日本をリードするかに見えたころ、太平洋戦争による中断が卓球界を襲う。

一九五〇年、「藤井選手の替え玉受験事件」が卓球界を震撼させる。日本選手権を四連覇中の天才藤井則和は、戦後の病苦に倒れた今孝の悲願〝世界制覇〟を実現できる最大のホープだった。初の全米遠征の直前、関学の卒業試験でのエースの不祥事で、遠征は中止され、岩村らが描いた〝学生選手の世界制覇〟は、見果てぬ夢に終わるかに見えた。

しかし一九五三年暮れ、日本卓球界は賭けに出る。

翌五四年四月、卓球発祥の地、英国の首都ロンドンで行われる第二十一回世界選手権大会に、全員が無名の学生新人チームを日本代表として派遣することを決定したのだ。

紛糾した理事会で、豪気をもって鳴る名古屋の後藤理事は、反対派に対して言い放った。「確かに日本卓球協会には金はない。だから、選手に集めさせればいいじゃないか」。かくして当時一人八十万円、九〇年代の貨幣価値で一二〇〇万円の大金を、選手たちがそれぞれ冬空の街頭十円募金やカンパで調達することになり、辛苦の末、遠征が実現した。

「一生に一度の出来事だ。一年留年して、完全な準備をしよう」と、日本大学二年の荻村、専修大学二年の富田、三年の川井、大阪薬科大学の江口らが決議した。岩手大学の優等生の藤井基男は、「君は欧州型の練習相手としてどうしても欠かせない。君も留年しろ」と呼びかけられたが、彼は夜行列車で学年試験中を盛岡・東京間の往復を重ね、そのかいあって、留年はしなかった。

後藤は、学生選手たちの必死の錬磨と、世界を制する満々たる覇気を知っていた。そのくせに、出発を前にして新聞記

者たちにこう言った。「この連中は、ロンションだよ。えっ？　ロンドンへ行って、小便して帰ってくるだけさ」。満座の中での辱めを受けた若者たちは怒りを堪え切れず、「後藤を見返してやる！」と誓い合った。

後藤団長の背水の陣は成功した。心理的に千仞の谷に突き落とされた学生たちは自力ではい上がった。劣悪な対日感情が満場の観客を支配し、日本への嫌がらせも相次ぐ中で、平均年齢二十歳のチームは大健闘し、荻村の男子シングルスをはじめ、男子団体・女子団体の三種目に優勝した。春まだ浅いウェンブレーの氷雨の中、戦後初の日本人スポーツマンの英国遠征は大成功に終わり、敗戦にうちひしがれていた日本人の気持ちを明るくしたのだった。選手たちは満場割れんばかりの拍手のうちで、モンタギュー会長から金メダルを、母君のスエスリング夫人から優勝杯を授与された。

猛烈な練習量を伝統とする学生卓球界は、その後も英才を送り続け、五〇年代から六〇年代にかけて、日本の卓球は世界に君臨し、技術情報の発信地となり、世界の卓球の発展に貢献した。

しかし、学園紛争が、猛練習の伝統を破壊した。日曜祭日の練習場は閉鎖され、ガードマンが深夜練習を謝絶した。学生選手たちは最初の数年間、ジプシー行脚をして練習量の確保に努めたが、やがて少ない練習量になれていった。暁を卓球台の上で迎える練習熱心さは、学生卓球界ではいまや神話の世界。それとともに〝勝てない日本〟の時代が続いている。しかし、九〇年代に入って、十年前からスタートした早期教育の成果が出始めている。

一方で、日本の学生卓球連盟が中心となり、世界の学生卓球界の交流が推進されている。コロンビア、ＵＣＬＡ、ＭＩＴ、エール、オックスフォード、アルト・ハイデルベルグなど、欧米の大学との交流が、日本学生チームの遠征、相手校キャンパスでの対抗戦という形で盛んになってきている。

また一方では、かつての感激の遠征を共にした大学ＯＢ選手が中心になり、一〇〇〇名ほどの同志を世界に募り、貧困・政治的迫害・病気などに悩む昔の好敵手を支援する国際スエスリング・クラブも設立されて、二十五年を迎えた。ピンポン外交、統一コリア、南アフリカ組織の一本化など、国際平和への華やかな貢献の歴史の陰には、大学の枠を越えた同志的友情や連帯感が、表舞台に立つ役員たちを支えている。それは、一時期、同じ学生として自由に行き来し、切磋琢磨した体験と親近感がなせる業であろう。

温泉遍歴三十年

／原川　恭一（立教大学教授）

かれこれ四半世紀以上も前の話であるが、友と語らい合って私は、「秘湯友の会」という会をつくり、意識的な温泉巡りを始めた。当時はまだ、昨今のように、「秘湯」という言葉が市民権を得てはいず、山峡（やまかい）に、山里に、海辺に、素朴な温泉があちこち点在していて、手つかずの自然が豊かに残っていた。

爾来私は、研究・授業の余暇を見つけては、会員と共に、あるいは一人で、もしくは二、三人の仲間と連れだって全国を巡り歩き、訪れた温泉の数は一、九〇〇カ所を優に超えるにいたった。十年ほど前、アメリカ南部に滞在したおりには、アパラチア山脈の山懐深く分け入り、外国の保養温泉を体験してきもした。けだし、病膏肓に入るというところだろう。

長いと言えば長いこの温泉遍歴にあって、だが、不思議なほどに縁の薄い温泉というのがいくつかあった。藤原審爾『秋津温泉』の背景となった奥津温泉に隣接する、般若寺温泉もその一つである。中国山地から流れ出る吉井川河畔、奥津渓谷のほとりにひっそりと湯煙を上げるこの温泉は、かねてから泊まりたいと思いつつも泊まれなかった幻の温泉、いわば蜃気楼のような一軒宿だった。一度は、みごとな「扇天井」の一室に旅装を解き、湯にまでつかりながら、豪雨による増水のために宿を替え、またもう一度は、予約なしに立ち寄ったため、空き部屋がなく涙をのんだ。

一九九二年秋たけなわのひと日、だが私は、ついにこの宿に一泊する機会を得た。肌を染める鮮やかな紅葉の下、岩をかんで流れ下る奔流。その川中の小高い岩盤の上に建つわずか三室の離れ。大気は清澄で、食卓を調える女将も、変わらず雅びていて美しかった。文字どおりの蓬萊境である。聞こえるのはただ激しい水音だけ。日常の営みは遠く、そこにはとげとげしい文明も、人のさかしらもなかった。無量の寂寞の中、暮れなずむ四囲の山々に目をやりながら、私は、来し方遠い日々にしみじみと思いを馳せた。

英泉・広重の中山道六十九次散策

／永沢　満（豊田工業大学副学長・教授）

広重の東海道五十三次の版画は有名である。旅行が非常に困難であった江戸時代の人々が、この版画であこがれの旅に思いをはせたことは想像にかたくない。東海道五十三次の商業的成功のあと、中山道六十九次の浮世絵版画も出版された。今度は英泉・広重の合作になった。

中山道は、東海道とともに、江戸と京都を結ぶ日本の大動脈であった。東海道が日本橋の基点から品川方向に向かい、海に沿って進むのに対し、中山道は日本橋から神田に向かい、信濃路・木曽路を通る山の道である。東海道は近代になり新幹線もできて大きく変貌したのに対し、中山道はいまなお江戸の香りを残し、有名な木曽路（妻籠・馬籠）をはじめとして散策の名所を多くもっている。

私は四十代のころ、ひどい不整脈に悩まされた。その克服のために、英泉・広重の版画帳を持って、よく中山道を散歩した。初めは、昔をしのぶとシャレたわけだが、そのうちに本性が出て、この画はどこを写生したのかと疑問をもつようになった。研究者としての悲しいサガと思うこともある。各宿場を最低五回は歩き回り、その記録を一冊の冊子にまとめたころには十年もの年月が経過し、不整脈もほぼ治っていた。

趣味の研究は楽しい。「広重はここに立った」と自分で確信したときの気分も爽快だが、人に説明するのも楽しい。来客に写真と版画を見せて、次のように同意を強要する。例えば、広重の小田井宿である。「この画はどこか変でしょう。旅人が野原を行き交っている。なぜ、街道ではなくて野原を歩いているのでしょうか。それは中山道の道筋を見れば理解できる。中山道は小田井宿に入る前に弓なりに湾曲している。天気のよい日にはショートカットしたくなるのは人情である。この辺で撮った山の写真は画とそっくりでしょう」。これは簡単な例である。

得意とする場所は大宮・熊谷から守山・大津まで三十宿ほどである。特に英泉の盗作問題は面白いといわれる。しかしまだ全部を話したことがない。いつもエンドレスになることを心配して、家内に止められる。